INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ

ニュース
NO.78

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1995年10月11日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウスミタケビル102
TEL. 03-3821-3737
FAX. 03-3821-6479
発　行　人　住友　義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

◈「ユースフル」台湾訪問レポート

＝アジアの架け橋を目指して 国境を越えた友情と信頼の創造＝

●訪問期間：3月10日～16日　●訪問地：台湾（台北、台南）

MRA青年グループ「ユースフル」結成、六名が台湾を訪問

MRA青年グループ「ユースフル（YOUTHFULとUSEFULをかけた）」のメンバー六名が、去る三月十日から十六日まで国際MRA台湾協会劉仁州秘書長の招きを受けて台湾を訪れた。この一週間に台北と台南を回り、台湾のMRA関係者や大学生、そして日本統治下で日本語教育を受けた年輩の方々と親善交流を行った。

今回の台湾訪問のきっかけは、昨年の第十八回MRA日本キャンペーン小田原会議にさかのぼり、かつ「ユースフル」結成とも関係がある。小田原会議に参加した劉仁州氏から「日本人の若い人達のグループを作ったらどうか」と強く勧められた、小田原会議参加者の飯島亜由子さん（第一回APYC参加）が、会議のミーティングで「日本のMRAの若い人達のグループを作る」と発表し、「ユースフル」結成へと動き出した。そのことを劉仁州氏に知らせたところ、「台湾と日本の若者の交流を是非進めたい」という返事が十一月に「ユースフル」結成準備会のメンバーのもとに届いた。そこで早速メンバーの森山浩行君と私は三月に台湾を訪問する事に決め、その参加者を募り、合計六名が集まった。今年の一月に「ユースフル」は正式に発足

□主な内容□

◆「ユースフル」台湾レポート　1P
台湾で築いた友情と信頼の輪
◆MRA講演会　11P
「日本の進路を決めた10年」
鈴木陸二
◆水木揚の「日本改革論」〔後半〕　18P
日本経済新聞社取締役論説主幹
市岡揚一郎

し、毎月会合が開かれている。三月の会合では台湾出身の蔡汝浩日本大学教授から台湾の歴史、文化や政治状況などをお聞きし、またそれとは別に台湾訪問メンバーは多くの勉強会を重ね、訪問をより充実したものにするべく努力をした。

交流の目的は「違った政治状況、民族、環境の中で生きている者同士が同じ問題に対して議論をすることでお互いを理解する」とし、以下の四つのテーマについて台湾の方々と議論、意見交換をすることを希望した。

①開発と環境保全について
②アジアの融和をどのように築くか
③日台関係について
④選挙腐敗と選挙民の役割

以上のテーマとあわせて台南行きの希望を台湾のMRAの方々に送り、具体的なスケジュール作りは台湾の方々におまかせした。①は台湾大学の環境保護グループの学生たちと、②③は台湾MARユースグループ「ホープ・イン」の大学生と週末キャンプを通じて話し合う時間を得、④は台湾の選挙浄化運動を指導している劉仁州氏より直接お話を聞く機会をいただけることになった。これらのディスカッションをより充実したものにするために、事前勉強会は二月から出発直前まで計十回に及び、一回につき平均二時間を超えた。文化の夕べや歌の交換、自分の経験や考えの発表という時間もスケジュールの中にあったが、これらについては討論ほど重要視していなかった。文化の夕べには剣道有段者がメンバーにいるので剣道を、歌は出発直前に決め練習なしのぶっつけ本番で歌うことになり、自分の経験や考えは個々人が考えておく宿題ということになった。訪問の準備段階では、議論を通じてお互いを理解するという考え、または違う背景を持つ者同士の議論への強い関心があった。

国際MRA台湾協会の活動

一行を乗せた飛行機は三月十日の午後四時に成田空港を出発し、午後八時三十五分に台北の中正空港に到着した。空港にはMRA台湾協会事務局の張清江氏と欧陽慧芳さん、蘇仁亮氏が迎えに来て下さり、彼等の車二台で台北市内のユースホステルに向かった。

翌朝、張氏がホステルまで迎えに来て、MRA事務所まで案内して下さった。朝食を事務所でご馳走になりながら、台湾でのMRA活動についてお話をうかがった。事務所での朝食はとても気配りが行き届いている感じがした。

台湾でのMRA活動は、一九五〇年のアメリカのマキノ島会議にさかのぼり、その後外交官を務めた劉毓棠博士が退官後、大学を中心に活動を広げ、現在はアジアの青年との関係強化の促進に重点を置いて活動している。また、劉仁州氏の始めた選挙浄化運動も活動の一つの柱になっている。

台湾の環境問題と学生の意識

その後、蔣介石総統記念館である中正記念館を見学に行き、昼食を近くの店で食べた後、台湾大学に移動し、「開発と環境保全」について台湾大学の環境保護グループの方々と議論した。環境問題を選んだ理由は「成長著しいアジア地域の中で、持続可能な開発という世界的な環境保護の理念をいかにこの地域に根付かせ、協力体制を整備していくかという問題に対し、責任ある地域経済牽引者として日台双方はコミットしていかなければならない」からである。台湾

●中正記念館で、左から森山浩行、山田浩、武藤立樹、中村和彦、太田敦之、菊池慶子

の環境問題は「狭い土地、人口密集、急速な経済発展とエネルギーの大量輸入と消費、都市化、大気汚染、騒音、生活廃棄物の増加(日本の半分)、原子力発電問題」などがあり、日本と似た状況にある。台湾大生は原発について「技術のない台湾には荷が重過ぎる」と言い、開発と環境の問題に対しては、「大量消費は良くない。生活水準を下げる勇気が必要だ」として、途上国の支援に対しては「面倒を見すぎるのは良くない。基本は自助努力だ。その上で私達に援助できることがあったら考える」ということだった。環境と開発という世界全体の問題に対して、日本と台湾がそれぞれの立場からどのように取り組めるかということを論議したかったのだが、台湾大学の学生は「まだ自国の問題が大きく他国の問題はそれから」という感じで、認識にずれがあった。「台湾の経済的実力を考えれば地球環境全体について考える必要があるのではないか」と感じた。

●台湾大学校庭にて　台湾大学環境保護グループと

週末キャンプで触れた学生の優しさ

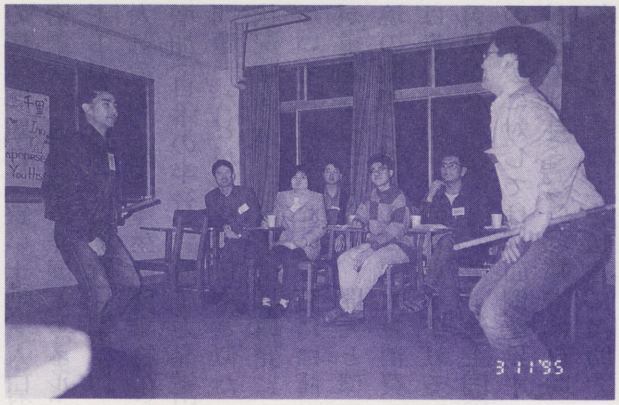
台湾大学を後にして、「ホープイン」と「ユースの会」のメンバー十五人と週末キャンプを行うため、車で台北市郊外にあるキャンプ場に向かった。目的地に着いたのは夕方だった。週末キャンプは日本と台湾の若者がゲームや歌、そして自分の体験を発表しそれを皆で共有することで、お互いがよりよく知り合えた非常に優れた企画であった。キャンプ地はあいにくの雨のため、夕方に予定されていた散歩及び自己紹介の時間はなくなったが、私達は男女とそれぞれの部屋で台湾の参加者と自己紹介を始め、夕食の時間には既に仲の良い友達になっていた。これは「台湾の学生たちの性格が非常に明るく、私達を積極的に、そして暖かく仲間として輪の中に迎え入れてくれた」からであり、私達は台湾の学生の「優しさ」に感動した。彼等のこのホスピタリティーは今回の台湾訪問中一貫して発揮され、私達の目を開いてくれた。私達が日本に帰国後、四月に香港とフィジーからMRA関係者が来日し、多くの失敗や反省はあったが、彼等の歓迎会を催したり、観光地に案内できたのも、台湾の学生たちの私達への暖かいホスピタリティーに触発された所が大きい。

夕食の後、お互いの名前を覚えるためのゲームを行い、その後に「マイストーリー」と題して、参加者の意見や体験の発表が行われ、日本人は学生生活で熱中したこと、それから得たことなどを語った。山田君は旧ユーゴスラビアの難民キャンプにボランティアとして行った経験を話し、ユーゴの友達のためにも平和への決意を固めたことを述べた。森山君はロシアやカンボジア、神戸にボランティアとして行った経験から、ボランティアには被害者を精神的にケアする役割もあることを説明した。中村君は森山君と一緒に行った神戸でのボランティア経験から、非力に見える個人が社会に対して建設的な役割を担えることを、ユーモアをおり混ぜながら語った。これらの体験談は、国際的な体験やボランティア経験の少ない台湾の学生には、非常に新

●週末キャンプの参加者

鮮かつ良い刺激になったと思われる。

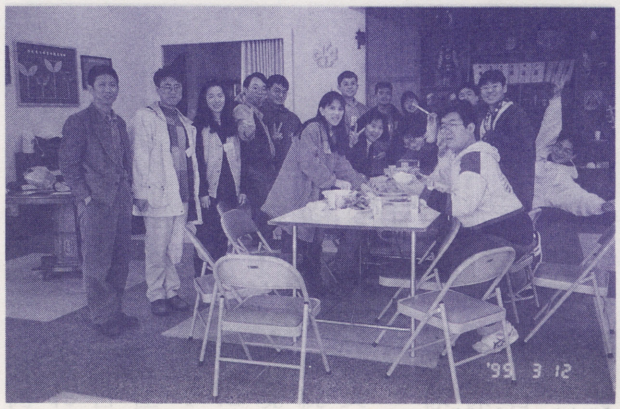
その後は台湾、日本とも三曲ずつ歌を交互に歌った。台湾の参加者が日本の歌を中国語で歌ったことが、私達にはとても驚きであった。アジアでは日本の歌謡曲が流行っているそうで、日本の曲をカバーしている台湾の歌手が多くいて、その歌を歌ってくれたわけだが、そのような背景を割り引いても彼等の気遣いが感じられ、人をもてなすとはこういうことなのかと感心させられた。最後には長渕剛の「乾杯」を日本語と中国語で合唱した。アジアには日本の歌を日本人とお互いの言葉で歌う若者が存在している。貧困と分裂に苦しみ続けてきたアジアを結ぶ一つの文化的要素を日本が提供できる可能性があるのではないだろうか。しかし、その一方、日本の経済進出という一面があることも忘れてはいけない事実である。文化の夕べでは、武藤君と山田君が剣道の演武を行い、大きな喝采を浴びた。プログラムが終了したのは夜の十一時をすぎていたが、多くの参加者は寝室に行こうとはせず、会議場でギターを弾いたり、話し込んだりしていた。


●演武をする武藤君と山田君

翌朝は起きてから皆で一度会議場に集合して「静かな時間」を十分ほど持った。MRAの「静かな時間」を詳しく知らない私達は、初めて自分の「内なる声」を聞き、それを他人の前で発表し、意見の交換を行う経験をした。これは、日本人を招いた劉仁州氏の目的の一つに、「日本の若者にMRAの考えをより良く理解してもらいたい」ということがあったからだ。私達にはまだ、この「静かな時間」がぴんと来なかったため、発言は出来ずに台湾の方々の発言を聞いていたが、朝起きてから静かに心を落ち着かせることは、非常に素晴らしいことだと感じた。

ディスカッション　台湾から学ぶもの

朝食後、「アジアの融和をいかに築くか」というテーマで一時間ほど議論し、その後ティータイムをはさみ「これからの日台の関係」について一時間半議論した。「アジアの融和」では日本側がコーディネーターを務め、「アジア地域の中で経済牽引者の地位を占める日本と台湾が、それぞれに抱えている外国人労働者問題」について話した。責任者であった私は「日本ではこの問題が日本がアジアと上手くつき合えない、融合できない象徴的な問題であり、当然台湾でも外国人労働者問題が深刻な問題であろう」と考えてこの問題を選んだのだが、台湾の現状はまるで違っていて、この問題に関して台湾から教えられることばかりであった。「中国」は昔から


●週末キャンプの朝食

●週末キャンプにて　東京音頭を踊る日台の参加者達

華僑として外国に行っているからこの問題には馴れている。台湾では現在外国人労働者の自由化を促進中である。日本がこの問題でつまずいた理由の一つは、日本人の外国人に対する冷たさにあるのではないか」等々耳の痛い話が続いた。台湾では現在、アジアオペレーションセンター計画を掲げ、アジア経済の中心地になろうとしている。そのため外国人労働者の自由化という痛みを伴いながら規制緩和に取り組んでいる。台湾と日本のこの問題の根本的な差は、真剣に

●ディスカッションにて、左端の女性が通訳

アジアの共に生きていくのか、という問いに対する心構えの問題であるように思われる。外国人労働者問題から、アジアの融和におけるNGOの役割や開発援助（ODA）の在り方についても話したかったが、労働者問題に終始してしまった。私達にとってはためになったが、台湾の学生にはこのディスカッションはつまらないものだったように思われる。

次に台湾側のコーディネートで行われた「これからの日台関係」については、議論の前にお

●ディスカッションにて、熱心に話を聞く台湾の学生

互いが相手に対しているイメージ、印象を一人一人発表し、その後に、先ず日本の戦後処理に関する諸問題（第二次大戦に関する補償問題・責任所在など）が論点として提起された。日本が行った戦中から戦後にかけての行為に対して、私達が謝罪したところ、学生たちは「過去は過去、これから如何により良い関係を構築するか、大事なのはむしろそのことである」という意見が多かった。ただ「より良い関係」というのは、人によっては、日本と台湾の国交回復であったり、台湾と中国との関係回復への支援だったりと、台湾の方々の中でも意見統一が出来ておらず、台湾の複雑な状況（民族問題など）を垣間みた思いであった。台湾の複雑な状況ということでは、日本人に対して外省人（1945年以後に大陸から台湾へ渡ってきた人々、その多くは国民党、軍関係者）は反感を持っているし、ここにいた学生が台湾の意見を代表しているわけではないことを忘れてはいけない。

私達は議論を終えてから昼食を食べ、キャンプ場で大部分の台湾の学生たちと別れ、車で数名の台湾の大学生と共に台北市まで戻った。

台南でみた台湾の複雑な政治状況と歴史

翌十三日は、七時五十五分発の国内航空で台南へ向かった。四十分のフライトだったが、あまりの揺れの激しさに無事台南へ着けるのかどうか心配したが、予定通り台南へ到着した。台南空港は空軍と共同使用になっているため、敷地が広い上に、軍用機が何十機も配備されていた。空港のゲートは台湾を代表する都市の一つである台南の空港のものとは思えないほどみすぼらしいものだった。シャッターが閉まっており、そこはまるで大きな倉庫のガレージのようだった。後から聞いたのだが、やはり最初に軍の基地ができ、その後に空港ができたため、中正空港や他の空港とは根本的な作りが違うのである。ここに、中国との難しい関係、内省人（台湾出身の人々）と外省人の関係が端的に表れているように思えた。

外省人が、大陸反攻を掲げて軍備優先であったことと、その結果として内省人の利益となるインフラの整備を怠ったことが、この空港を見るとよく分かる。

私達が張氏と共に台南空港を出ると、劉仁州氏、祭貴珠夫妻と陳美珍さん、欧陽慧芳さん、そして通訳として、日本へ留学している学生二人が迎えに来てくれた。空港から車に乗って、早速陳さんと学生二人の案内で台南観光へ出発した。まず台湾で有名な成功大学を見学した。朝早かったせいか台湾大学より人気は少なかった。敷地内には大きな池があり、そこで結婚式の写真を撮っているカップルが一組いたので一緒に写真を撮った。台湾大学同様、日本に比べて一般の人にも開かれた大学という印象を受けた。また、夜間コースもあるそうだ。成功大学を出てから、大学の近くのお店で売っている肉まんなどを頬張りながら、歩いて孔子廟まで行き、お参りをしてから次の訪問先の第二高等学校まで車で行った。

ここでは、日本統治時代の資料室や、図書館、校庭、そして学校内も歩いて見学した。離れにある図書館には、最新のコンピューターが五台ほど設置してあり、日本の教育現場とさして変わらない風景に皆驚いた（コンピューター製造と使用の盛んな台湾では当たり前なのだが）。図書館の奥には、日本統治時代の記録や写真が数多く保管してある一室があった。私達が行くと、館長さんがその中から昭和天皇が皇太子の頃の写真を見せて下さった。また校内にある日本統治時代の資料室には、当時の歴代校長先生の写真が飾ってあり、彼らが皆日本人であったことが分かった。また不発弾など、日本の統治時代を思い出させる様々な品物が、その一室には数多く置かれていた。他の民族を占領、統治した日本の過去の行為に私は恥ずかしくなると共に、このような品々が残されているのが非常に不思議ではあった。台湾の方々の親日の表れなのかどうかは分からないが、韓国では考えられないことだと思った。校舎から出ると校長先生が学校の説明をして下さった。

●成功大学キャンパスにて

●第二高等学校校内で学生と話すメンバー

説明によると、この学校は日本統治時代に日本人のために建てられたもので、当時は第一高等学校と呼ばれていた、台湾で一番最初に作られた高校だった。そのため、昭和天皇が皇太子時代にこの学校を訪問している。しかし、日本の敗戦の後、日本人の学校が第一というのはけしからんということで、第二に変わったとのことだった。日本統治時代からの歴史と、日本との関わり合いの深さと、当時の方々の民族意識の高揚が感じられた。

個人同士の理解を深めた歓迎会

その日の私達の歓迎会は、MRA関係者のマンションの一室で行われた。私達が到着したときには既に数名が来ていた。学生も何人かいた。私達が入った後に続々と到着して、最終的には、総勢三十名ほどになった。台南のMRA関係者と台南の大学生がその中心であった。オーストラリアの白人も一人いた。最初の一時間はそれぞれ自己紹介をし、食べながら、筆談を交え、お互いの家族関係や大学の

専攻、趣味などを話した。食べ物はサンドイッチ、鳥の足、フルーツ、サラダ、餃子などであったが、どれも手作りらしく、非常に美味しかった。食事も一段落すると、中国の琴を二十分ばかり弾いて下さった。お返しに私達は歌を一曲披露させてもらった。その後に、私達の経験を話す時間が与えられた。それぞれ、ボランティアに行った話や、台湾の印象、MRAをなぜ知ったかなどを話した。台湾の方からも、祭貴珠さんにMRAとの出会いについて話していただいた。個人がどういう体験をし、何を考え、どのように行動したかということを話す時間が、台湾ではこの歓迎会も含めて多かった。私達はディスカッションを目的として台湾へ行ったのだが、それ以上にもっと深いところで個人同士が理解し合えるということを台湾で学んでいたのではないかと、今考えると思える。歓迎会は夜の九時頃まで行われた。終了後、私達六名は、女性一人、男性二人と三人という三つのグループに分かれて、三軒の家に一晩泊めてもらうことになった。

●台南での歓迎会　多くの大学生と知り合う

台湾の日常にみる日本の影響

翌日は車で台湾最南端の墾丁公園へ向かった。台南市には夕方に戻った。ここで、劉氏の友達のご両親、謝夫妻の家に行った。謝夫妻は小学校で日本語教育を受けた世代であり、日本の統治時代を古き良き思い出として捉えている。私達を大歓迎して下さり、流ちょうな日本語で話をした。孫に日本語の歌を教えていると言った（後で日本語の歌を歌ってくれた。テレビからは衛星放送「Drスランプあられちゃん」が映し出されていた。孫は両親から中国語、祖父母から日本語、フィリピン人の家政婦から英語を教えてもらっている。これからのボーダレス時代の中でアジアが今、昔の植民地時代の負の遺産を現在に生かそうとしているかのようであった。謝夫妻によると、日本語教育を受けた人の中にはもう日本語を話せなくなった人もいるが、同級生達は今でもクラス会を開き、日本の先生を台湾に呼ぶそうだ。謝さんは小学校時代の写真を今でも大切に保管していて、私達に見せて下さった。白黒の写真の中には小学生の謝さんがいた。当時彼等がもう少し年齢が高かったら、このような反応を示さなかったのかもしれない。私達は日本人を嫌悪する視線に出会わなかったわけではなく、台湾訪問を通じて何回かそのような視線に出会ったのは事実である。やはり、その辺の感情は、台湾人の中でも決して一枚岩ではないと言える。しかし、「ここはお前達の来るとこ

●日本統治時代の思い出を日本語で話す謝夫妻

●歓迎会でユーゴスラビアでの体験を話す山田君

ろではない」と韓国のパゴダ公園で老人に言われた中村君の経験などをあわせて考えてみると、やはり韓国、中国などに比べると、台湾の方々は親日的と言えるのではなかろうか。

政治浄化は自身を問うこと

十五日は台南での最終日であった。空港に行く前に、台湾の政治浄化運動の報告を劉仁州氏にしていただいた。私達の事前勉強会では、台湾の政治腐敗は日本のそれを上回るとされたが、劉仁州氏は九三年の総選挙で候補者に「買収しない」、「資産公開法を成立させる」、有権者には「買収されない」という文書にそれぞれ署名させた。その結果、候補者全体の四十%に当たる百六十二人、七十万人の有権者の署名を集め、同年「陽光法（資産公開法）」が成立した。さらに彼は運動を全国規模で効果的に、効率的に行うために教育大臣の協力をとりつけて、大臣から全国の学校に署名用紙を配布させ、学校を通して子供達の両親に用紙を配った。さらに、李登輝総裁との直接会談を実現させ、その模様をマスコミ各社に報道させ国民の関心を集めることにも成功した。最後に「陽光法」成立前には議員に電話をかけ、また、次世代の教育のため、各地の高校で講演を行ったり、二百人位の大学生を集めて教育活動を推進している。しかし、台湾の選挙浄化運動は始まったばかりであり、台湾の政治にはまだまだ多くの問題が残されている。「陽光法」の罰則規定が甘かったり、腐敗が地方の細部にまで及んでいたり、選挙の問題がお金から暴力へ移っていることなどだが、これらの問題をこれからの改善すべき課題として劉氏は指摘した。

私達が一番感銘を受けたのは、「私は買収される選挙民を非難しない。私も彼等も普通の人間であることには変わりなく、人生において誘惑に負けてしまうことが度々ある。だからこそ選挙民のために働き、勇気づけた。市民として社会の将来を、親として子供の将来を考え、責任を持つことを訴えた。そしてそのために先ず自分達自身の心をきれいにすることから始めた」という劉氏の言葉だった。日本人は政治浄化を考えるとき、政治家の倫理観が高まることのみ期待してはいないだろうか。「先ず自分達を問う」ことから始めなければいけないことを私達は学んだ。

●選挙浄化運動について語る劉仁州氏（左端）

●台南YMCA表敬訪問　日本語を教える日本人教師と

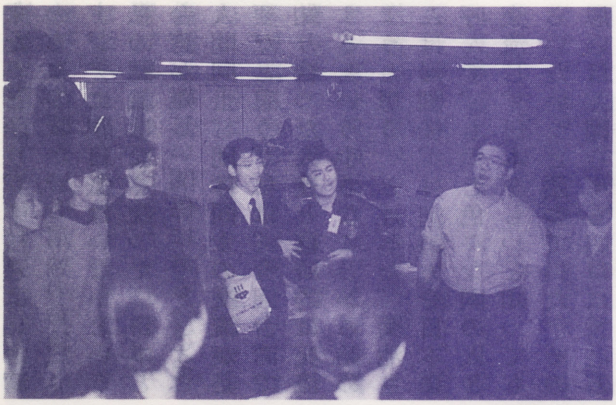
●台湾最南端にある墾丁自然公園にて

三つのHでアジアに橋を

台南空港へは通訳をしてくれた劉君や、MRA関係者が見送りに来てくれた。台南空港を飛び立った飛行機は一路台北に向かった。台北では先ず師範大学に行った。師範大学では大学生との交流昼食会が催された。台湾のMRA活動は、大学生がその中心的役割を担っている。各大学にMRAのコーラスサークルがあり、一つのインカレのような組織になっている。私達は昼食をしながら自己紹介をし、一緒にコーラスをした。コーラスの後は二人ずつ三組に分かれて、台湾の学生と様々な話題について話した。彼等の人数はざっと三十名くらい。最後に「乾杯」を日本語と中国語で彼等の演奏付で歌い、師範大学のペナントをもらった。その晩お別れミーティングがMRA台湾協会理事長の蘇氏宅で行われ、私達はそこで今回の台湾訪問で得た考えを語った。私は自分のいたらなさを日本の友達と台湾の友達の行動を見て気付き、今までの自分を反省した。池さんは台湾で大きな友情を育むことが出来たことに感謝の意を表した。山田君は台湾の人達の暖かさについて述べた。中村君は政治改革における台湾人の自覚ある行動を日本人として見習うべきだと述べた。最後に森山君が、「日本がアジアの架け橋になり、世界平和に貢献するために自分は全力を尽くす」と述べた。これは森山君の決意であると共に、メンバーの一致した意見でもあった。そして、「アジアの協力を私達が進めよう」と台湾の方々と誓い合った。私達の話の後、台湾の方々からも多くの話が聞けたが、その中でも劉毓棠先生の言葉が、台湾の方々を代表し、また私達の胸にぐっと迫るものであった。「橋は架けるだけではダメだ。そこにあり続けなければならない」。この言葉は、無事に台湾訪問を終えてほっとしている私達を現実に引き戻してくれた。橋を架ける気持ちは勿論大事だが、架け続ける努力が一層大事であることを教えて下さった。今後私達が今度の台湾訪問で知り合った人々と交流を続け、まず橋の土台造りをしなければならないのだ。それは、劉先生の言葉を借りれば三つのH、Heart、Hand、Headを用いて行わなければならない。最後に皆で中国語の歌を歌った。これで皆に会えなくなると思うと無性に悲しくなった。周りを見ると皆も名残惜しそうである。ただの観光旅行では味わえない思いを胸に私達は、何人かの学生にオートバイ、車に乗せてもらってホテルまで帰った。ホテルの私達の部屋で、送ってくれたメンバーと十二時近くまで話し込んだ。彼等は今回の写真をもう現像し、持ってきてくれただけではなく、お土産まで買ってきてくれた。本当になんとお礼を言って良いのか分からなかった。彼等の暖かさ、優しさ、面倒見の良さ、気の配り方、どれをとっても素晴らしく、一人の人間として学ぶべき点が多かった。一週間前に出会った人間にここまでしてくれるとは思いもよらず感激した。

しかも、その感激は次の朝にも味わうことが出来た。私達は六時に起床し、七時に朝食を食

●師範大学で学生との昼食会



●同じ歌を日本語と中国語で歌う日・台の学生

べる予定だったが、何とホテルに来るまで二時間はかかる人がお別れの挨拶を言いに朝食に駆けつけてくれたのだ。結局、時間の都合をつけて入れ替わり十人近くの人がやってきた。本当に口では表現できない気持ちが胸に押し寄せてきた。この友情は大事にしていきたいと心に誓った。

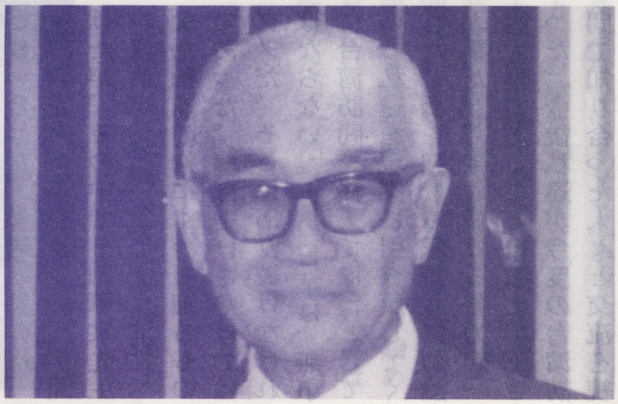
私たちが台湾で学んだこと

私達の飛行機は十一時に台北を飛び立った。とても短いようで長かった一週間だった。私達はこの旅行で何を得てきたのか。森山君は「今回はボランティアではなく、若者の交流が目的だったため、自然に人に接することが出来た。台湾の方に、夢を叶えるために頑張るなら手助けをする、と言われ大変感動した。将来に亘る友情と協力を培うため、若者が国という狭い殻に閉じこもらず、個人として交流することの大切さを学んだ。何より、この時代に同じ地域に生きる人間として、共通の部分が多くあることを認識することが出来た」と語り、中村君は「台湾の方々の暖かい心遣いのお陰で、アジアに親日派はいないという私の認識はなくなった。日本と台湾が難しい関係にある今こそ、人間同士、団体同士の交流が必要だと思う。私は、今回台湾で知り合った人達と継続的に交流するという小さなことから始めようと思う」と述べた。菊池さんは帰国後、「外国の方を日本に呼んで、もっと色々な国の人と交流し、日本をもっと知ってもらいたい」と語っていた。その思いは、図らずも四月に香港とフィジーからMRAの関係者が来日し、「ユースフル」の一員として彼等との交流を行い、実現できた。武藤君も、高校教師という忙しい仕事の合間を縫って、台湾から来た手紙の返事を一所懸命書き、島根県発の国際交流を行っている。山田君は台湾の方々の優しさに大変感謝し、学ばなければと考えると共に、「外国の人とあれだけ交流ができるのだから、逆にもっと日本人とも交流をして、多くの人と知り合いたい」と語っていた。私は、「今まで達の先輩達が築き上げてきた台湾との信頼関係に気付かされた。私達は台湾でよい交流をしてきたわけだが、これは彼等のお陰と言っても良いだろう。彼等に感謝すると共に、私達はこの信頼を保ち、発展させる責任を持っている」と考え、「ユースフル」でこれからも国際理解を進めていく決意を新たにした。この台湾訪問は「ユースフル」の年中行事にしたいと考えている。これは、私達が台湾に行って、是非他の方々にも彼等と交流してもらいたい、と心より思ったからで。今年台湾へ行った山田君をリーダーに来年の台湾訪問の計画を立てている所だ。是非、人間同士の信頼関係、言葉を越えた交流、同じ人間としてどこに共通点があるのか、などについて台湾訪問を通して色々な人に体験していただき、意見交換などもしてみたいと考えている。

最期に、日本と台湾のMRA関係者の方々に、貴重な体験をさせていただいたことに対する感謝の意を表してこの文章を終わりたい。

（終）

（成城大学四年　太田敦之）



●MRA台湾協会のご意見番　劉毓棠先生

●中正国際空港にて

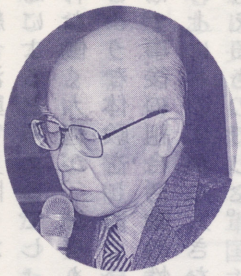
MRA講演会シリーズ

—戦後50年—

『日本の進路を決めた10年』関係者による証言

去る2月25日に開催されたMRA講演会では、1950年代に日本の復興、国際社会への復帰、進路の決定に関わった人々の記録をまとめた「日本の進路を決めた10年」の関係者に貴重な写真も交えて、当時の経験を証言して頂きました。今回はその中から鈴木陸二さんの発言を紹介させていただきます。

東芝労使とMRA



鈴木 睦二
元東芝勤労部長

御要[illegible]により、東芝の労使関係が戦後十年間にその基本的な性格が形成され、そのことにMRAが大きく関わったということについてお話させて頂きます。

東芝の労働組合は、終戦の翌年早くも結成されましたが、結成大会の席上おびただしい要求が決議され、ただちに会社に要求を提出してストライキに入るという極めて急進的な展開を見せましたが、これは暴力革命を企図した極左政党の指令によるものでした。革命は通常工場労働者の間から起きております。極左政党は、国営では国鉄、民営では東芝に革命の拠点を求めたのです。

就業日よりストライキの日数の方が多いという組合活動、経営者の軟禁、ハンガーストライキ、管理者の吊し上げによる職場の無法地帯化、長時間にわたる蟻地獄のような拘束の中で行われる団体交渉等々、過激な組合活動が続く中で、例えば人件費が売上の（利益のではない）七十%という異常な数字でもうかがえるように、業績の著しい衰退を招き、インフレの猛威を防止するためドッ[illegible]インが打ち出されるに及んで、東芝は倒産寸前にまで追い込まれたのです。

このような状況下、極左政党はガラス工場の炉の火を落とすことを指令しました。炉の火を落とすことになると、作業は長期間休止せざるを得ないわけで、そこで働く人達は職を失うことになります。ガラス工場はキャップをはじめ最大の極左勢力を擁する職場でしたが、このような事態に対して素朴な労働者は極左勢力の意図を見破ったのです。そして、猛烈な妨害を排して新組合を結成しました。初めは三十名足らずの少人数だったのですが、次々と他の職場にも波及しついには従来の連合会に対抗する新連合会という全社的な組織に発展しました。

石坂泰三氏が社長就任

過激な組合活動のため危機に瀕しつつあった東芝は石坂泰三さんを社長に迎え会社再建に向けて再出発いたしました。

石坂さんは組合対策を含め毅然たる態度で経営の衡に当りました。そして、昭和二十四年七月、会社再建のため二十一%に上る人員整理を含む企業整備を断行したのです。

世間は大量人員整理に対し、従来にました過激な闘争が長期にわたって続くと予想したのですが、実は極めて早期かつ平穏裡に終了しました。

これは一言で言えば、組合員

●重電機経営者協議会とMRAとの懇談会（前列左から）東芝石坂社長（1人おいて）日立製作所倉田社長、富士電機和田社長、（後列右から）三菱電機前原取締役、同小野常務〔1951年〕

が極左勢力の主導による破壊的な組合活動を見限ったということによると言えるでしょう。素朴な働く人達が、身をもってこのような体験をしたということは、事後の組合活動の性格づけの上におのずから大きな影響を与えるものでした。

このような経過の中で、極左勢力は破壊破滅状態に陥り過激な組合活動からは脱したのですが、初期段階の組合活動の常として、公式的類型的な活動から脱し切れぬまま推移しました。

コーでの「チェンジ」

このような労使関係に大きな転機を与えたのはMRAでした。石坂さんは戦後いち早くブックマン博士ともお会いし、コーにも行き、MRAについて国内のあらゆる分野で積極的にPRしました。そして東芝の中では、労使それぞれの責任者である当時の勤労部長の河原亮三郎さん（後、専務取締役）、連合会の委員長だった山村悦郎さんの二人を長期にわたってコーに派遣しました。

コーで二人は素直に話し合い、敵対敵視し合っていたことを互いに謝り、みずからを「チェンジ」したのです。コーの静寂な環境の中で、ブックマン博士の言われる「インナーボイス（心の声）」に耳を傾けた結果ではないでしょうか。この二人が東芝に戻り交渉に加わるや雰囲気は一変しました。お互いに相手の話をよく聞き、組合は無理な要求をしなくなり、会社も組合の要求に素直に対応するようになったのです。そして新旧併存していた連合会も極左勢力の破滅に伴い一本化されました。

労働協約の締結と「ダイナミック・バランス」

当時、労使間で一番大きな問題は、労使の平和憲章ともいうべき労働協約の締結でした。この交渉は、昭和三十一年に締結するまでに二年という長い年月を要しました。それは戦後の混乱期の中、中央のみでなく、工場ごとに団体交渉が行われ、それぞれ異なる協定や慣行ができていたためそれらを統一するのに時間がかかったということも

再版のご案内

日本の進路を決めた10年

●国境を越えた平和のかけ橋●

元・MRA日本駐在代表
バーゼル・エントウィッセル 著
藤田幸久 訳

ジャパンタイムズ刊　定価1800円

本書は、生活に追われ、希望を失っていた日本人の中に、真の民主主義に目覚め、国際社会に復帰しようという意欲をかきたてようとした10年間の著者の体験をつづったものである。有力な政治家、実業家を回想しながら著者は、当時の日本人の平和に対する真しな努力を伝えている。著者の眼は経済大国として新たな国際的孤立に直面している現在の日本に対する警告の意味を含んでいる。特に韓国やフィリピンへの謝罪を素直に表明した当時のMRAの日本の関係者の態度は、最近の日韓関係の推移の出発点として注目される。（1990年6月3日朝日新聞書評より抜粋）

○お申し込みはMRA事務局までお願いします。

ありますが、労働協約交渉を通じて、労使はいかにあるべきかということを時間をかけて真剣に討議し模索したことによるものと言えます。その一端は、東芝の労働協約の中に独自の内容を持つ「平和条項」があることなどからも窺えると思います。

以上、戦後から労働協約締結までの十年間を回想したわけですが、この期間に東芝の労使関係の基本的な性格付けが出来上がったと考えています。

誤解を招かないために申し上げておきたいことがあります。それは河原さんは長きにわたって勤労関係の最高責任者を務めたわけですが、なれ合い的な労使関係を嫌い、常に「ダイナミックバランス」ということを強調していたということです。コマというものは一定のスピードで回転しているとき、最も安定しております。「ダイナミックバランス」とは、労使が互いに主張すべきことを大いに主張し合い、「何が正しいか」を見い出しこれに従うという意味です。

今こそMRAの精神に立ち戻る時

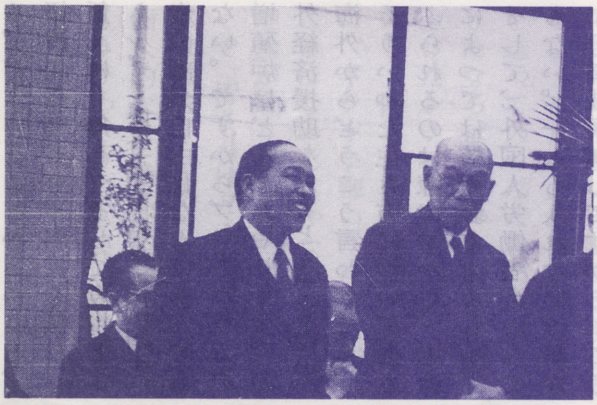
バーゼル・エントウィッセルさんの「日本の進路を決めた十年」という著書を拝見しますと、戦後の十年間、MRAは日本の各分野にあたかも水が地にしみこむように伝播しています。それは長きにわたる軍国主義下、心ある多くの人が、これではいけない、何とかしなければならないと新しい価値観を渇望していたことに対し、MRAが答を示してくれたためだったと言えるでしょう。

この点について、エントウィッセルさんは、「新しい考えややり方にこれほど心を開いた国は歴史上どこにもない」と言っております。

戦後の十年間を顧みるとき、当時の人々は貧しかったが故に、と言うべきかも知れませんが、志、倫理観、いさぎよさ、思いやりといったものを今の人よりはるかにもっていたように思います。戦後を謙虚に回顧し、そのことを更めて認識するだけでも大きな意味があるのではないでしょうか。

世間にみられるべきエゴイズム、欲望の肥大化、依然たる族議員の横行、既得権に執着する官僚、談合体質の業界、又、日本の産業社会を支えてきた労使関係が社会的経済的な変動の中で大きな転換点に立たされていること等を考えるとき、今こそMRAの精神に立ち戻ることの必要性を益々痛感する次第です。

（東芝グループの労使代表が現在も多数かつ継続的にコーのMRAの集会に参加し、労使関係の上に大きな影響を与えていることを申し添えます）（終）



●河原亮三郎勤労部長（左）と山村悦郎労働組合連合会委員長（右）〔1959年〕

●本年7月のコー産業人会議で発言する第16回東芝労使代表団

▷MRA月例会シリーズ◁

水木楊の 日本改革論 後半

日本経済新聞社取締役論説主幹
市岡揚一郎

市岡 揚一郎（いちおか・よういちろう）
昭和12年、中国上海市生まれ。自由学園最高学部卒業後、日本経済新聞社入社。ロンドン特派員、ワシントン支局長、外報部長などを経て、現在は取締役論説主幹。水木楊のペンネームで「動乱はわが掌中にあり」、「1999年日本再占領」、「2025年日本の死」などの著作があり、日本の行く末に鋭い警告を発している。本夏スイスのMRA世界大会に出席。

これまで、三つのシナリオがあることを申しまして、ハイテクに行くしかないんですが、ただその前にちょっと議論をしておきたいことがあります。それは実は「2025年日本の死」の最後の方に書いたことですけど、なぜ日本は消滅してしまったんだろうということです。そこに書いてあることは、1993年日本の前には四つの選択肢があった。その中で最悪の選択肢を選んでしまったために、日本は滅びてしまったんだということを書いた訳です。これはステージ四の崩壊の時代ですけど「一億総モラトリアムのツケ」というところでも書いてあるんですけど、四つの選択肢があったということが書いてあります。

四つの選択肢

一、江戸時代のシナリオ

第一の選択肢は名付けて「江戸時代のシナリオ」です。日本全体が●戸時代にもう一回戻る。どういうことかというと、経済成長率ゼロ、出世も無し、賃上げも無し、そして食糧とエネルギーは全部自給化を目指す。米の部分自由化なんてとんでもない。ですからプラトニウムの増殖炉はどんどんやります。海外経済援助なんてとんでもない、海外からどうこう言われても、そういった生き方について揺さぶられるのは嫌ですから、場合によっては核武装もよろしい。そして、外国人労働者もとんでもない。一人も入れない。静かに経済成長無しですから、こういうエアコンの効いたほどよい照明のある所で、午後のひと時を過ごすことも無いでしょう。そして皆落ち着いた上品で質素な西行、芭蕉のような心境でひっそり生きていく。こういう決意をするのが「江戸時代のシナリオ」です。もしもこれで本当に皆が行こうと決意を固めたら、さっき申し上げたハイテク化社会に行く必要ないですね。皆がそうだということならば「一億総養老院化」でも良いし、「二十世紀産業博物館」でも良いんではないかということ●相成りたいと思います。

二、一億総ヒューマニズム国家

二番目のシナリオは名付けて「一億総ヒューマニズム国家」。これはちょうど「江戸時代のシナリオ」と逆です。経済援助はどんどんやる。エネルギー、食料は安い所から入れる。どこから入れてもよろしい。そして外国人労働者は、中国から一億人来ると困るので、その辺の所は少し調整しなければなりませんが、原則は自由。ちょうど日本全体を多様な文化の花咲く新宿歌舞伎町のような社会にしていく。通常兵力はどんどん少なくしていって、大体国家主権なんてものにはこだわらない。もうアメリカの五十一番目の州で良いという覚悟を決める。こういうシナリオでございます。

実は私、あるシンクタンクに協力しまして、経済成長率について鉛筆をなめてみたんですが、このヒューマニズム国家のシナリオが一番経済成長率が高いです。

さっきの江戸時代はゼロでした。

三、マキャベリズム国家

三番目はこの中間で「マキャベリズム国家」になるシナリオです。これは経済援助はやります。やるけど必ず元は取る。外国人労働者は入れるけど、役に立つ人しか入れません。一定の通常兵力は強化していきましょう。そして二十一世紀を見据えて、アジア・太平洋地域に経済的な覇権を唱えるべく、通信・金融など様々な面で手を打っていくというシナリオ。これは日本は自分の都合の良いことばかりやっているじゃないかという批判を受けるでしょうが、そんなことは構わない。有名税として覚悟しておく。こういうシナリオです。

四、無策

四番目は極めて簡単です。一言で説明すると無策です。重要な問題は先送りしていくという話です。なぜ日本が滅びてしまったかというと、無策を選んでしまったからです。

米の[illegible]分自由化問題ですけど、今でもぐずぐずやってますけど、与野党こぞって「米の一粒たりとも輸入はしない」というようなことを言っていました。それは米は日本の文化・伝統に根ざした産品であるからと、こういうことを言っていた訳ですね。そして日本は自動車については安くて良いものが売れるのは当たり前じゃないかという訳です。しかし、もしもアメリカが「自動車はアメリカの文化・伝統に根ざした製品である」と言ったらどうなるんだという事について、我々は何も考えはしなかった。実にその種の話が多いんじゃないかと思うんです。ある問題に対してはシナリオAの論理を持ってくる。ある問題に対してはシナリオBの論理を持ってくる。よく鬼ごっこでありますね。柱につかまったらもう大丈夫、というような一種の柱を二、三本日本というプレーヤーは持っていたんじゃないかと。さっき申し上げた通り、何かを選ぶということは、何かを選ばないということです。こっちを選ぶということは、それだけのコストを払う[illegible]という事を覚悟しないで、全ての問題を決めないでどんどん先送りしていくというのがシナリオDです。

どれを選べば良いか

皆さんにお伺いしたいんですけど、この今申し上げた「江戸時代」と「ヒューマニズム国家」と「マキャベリズム国家」と、まさか無策は選びたくないでしょうから、この三つをどれを選べば良いかという事です。さっきも申し上げた通り、江戸時代で良いんだということを明日からひっそりと上品に質素な生活を送っていくんだという覚悟をしたならば、さっき最初に申し上げたシナリオ一でも二でも良いと、何もジェラルミンみたいに、ギラギラ輝いた社会に行くことはないんじゃないかという理論が成り立つんですね。

で、皆さんはどうだろうかと。私は齢五十七歳になりまして、個人的なことを問われるならば、もうひっそりでも良いかなと、かすかに心の中をよぎらない訳ではございませんが、しかし日本経済新聞の論説の責任者である市岡として考えた場合、それは多分もう無理だろうと思います。江戸時代に行くことはもう無理だろうと思います。早い話が、若い女性の方もいらっしゃいますけども、朝シャンというものがありますよね。朝シャンというのは朝のシャンプーをやってシャワーを浴びることですけど、ワンレンの髪の毛の表面積というのは十平方メートルあるそうでして、十平方メートルの髪の毛を洗剤で洗うということですから、それだけの石油を使っているということです。こういうことですから、じゃあ止めましょうか、もう二日に一回くらいにしましょうか。それも構いませんよ。だけど、まさか一週間に一回井戸端に行って洗おうか、という訳にはいかないでしょう。

そんな事より、例えば「そば」。かけそばを一杯と。醤油の原料の大豆はほとんど輸入。

そばだって最近はアジアから入ってくる。うどんの原料の小麦粉もほとんど輸入。わりばしも輸入。純国産はネギだけ。こ

ういう世界を我々はもう選んだということを考えると、これはもうしょうがない。

結局のところ、ハイテク化社会に行かざるを得ないだろうという訳です。

ただし、これは余談になりますけど、これから先、私は二十一世紀に向けて非常に大きなテーマになっていくのは、欲望の抑制をどうしていけるかという話になるかと思います。何でもかんでも、どんどんやれやれ、という訳にもいかなくなってくる部分が随分あるんだろうと思いますけど、現実的に考えるならば、我々は「グローバル・プライスィング」の大きな波に背中を向ける訳にもいかないし、洗われてしまう訳にもいかない。それに十分対応し、立ち向かい、そしてそれを自分の経済社会の中に組み込んでいく努力をせざるを得ないというのが現実的な選択であろうかと思います。そうやって考えてみた場合、結局どのような姿に日本はなっていったら良いのかという具体策について、少しお話しさせて頂きたいと思います。

どのような姿に日本はなっていったら良いのか

最初の部分はスリムな政府のためのプラン。どうやったら良いかという話です。第一はさっき申し上げた通り「規制撤廃」をやっていくという話です。ただしこれから先、考えなければならないことは、ちょうどレーガン政権が規制の撤廃というのに取り組んだ時に、行政管理予算局という所で個別に一つ一つの規制について取り上げて、そのメリットとデメリットというのを非常に具体的に分析しました。これをやらなければいけないと思います。ただ念仏のように「規制撤廃」と言っているだけではダメです。全ての規制には悪いだけのものは無い、必ず一定の効果というものがある。そのメリット、デメリットというものを具体的に検討していくことが、これからも必要であろうかと思います。

それと同時に規制の程度ということも考える必要があります。例えば許可制を届出制に直したら、規制の数は変わらないけども届出の方が数が増えた、ということもおこり得る訳ですから、その場合のことを考え、まだ増えているんじゃないかという議論はあまりにも乱暴過ぎです。

全ての省庁の設置法を時限立法に

次はちょっと飛躍します。二番目。全ての官庁には設置法というものがあります。元通産省の方もいらっしゃいますが「行政指導って何なのよ」ということを議論します。これは通産省設置法に根拠があるという話になりますが、私は全ての省庁の設置法を時限立法にしたら良いと思います。そして大蔵省設置法、あと百二十日ってなものを新聞に載せたり、ニューヨークの街頭に行きますと、今財政赤字いくらっていうのが電光掲示板にでてまして、あれは非常におもしろいアイディアだと思うんですね。皆で何とかして財政赤字を減らさなくちゃいけないぞって認識する意味において、大変おもしろいアイアだと思いますので、日比谷でも銀座でも良いから、大蔵省設置法、あと百二十日、皆で大蔵省のあり方を考えよう、という形でやるということは、全ての官庁の設置法を基本法を除いてはサンセット方式で、時限立法にしていったら良いんではないかと思うんです。そしてその度に、その是非について具体的に検討していくことが必要だと思います。

官僚組織を思い切って削る

三番目は一、二と大変に絡まっている事だと思いますけど、日本という国が明治以来、先進国に追いつくために作り上げてきた官僚組織の部分は思い切って削ってしまう。追い付き、追い越すための組織だけではなくて、実は戦争に勝つために総動員態勢で出来たものも随分ある訳です。そういったものについては、思い切って無くしてしまう。

具体的に申し上げると、市岡の話になりますけど、この間、日本経済新聞の論説で「大蔵省銀行局は必要か」とやったんで

すね。そうしましたら、これは大変な騒ぎになりまして、かの有名な独裁者であるところの斉藤次郎さんなどは文句を言って、私の所に来れば良いと思うんですけど、編集局長とか経済部長を呼んで「ひどいじゃないか」と言っているらしいですけど、私は間接的に言っておきました。「文句があるならいつでもいらっしゃい。そして反論があるなら、日本的金融行政かくあるべしと、今の大蔵省銀行局は必要であると、ちゃんと主張性、理論性を持って展開なさって、論文として発表なさると言うなら、いつでも日本経済新聞は紙面を提供致しますよ」と言ってあるんですけど、なかなかそうはならないですね。しかし大蔵省銀行局は必要かという事は、かなりのインパクトがあったようです。

大蔵省銀行局にも必要な機能はあります。それは金融・銀行機関に対する検査機能です。この機能が日本の国内から無くなってしまうと、金融機関が何でもかんでも無茶苦茶やると困りますから、しかも信用組合か何かになって貯金がパーになっては大変な訳ですから、そういったものを検討している、という機能は必要です。しかし、それは別に銀行局にある必要は無いんです。例えば、日本版SECと言われている証券取引管理委員会をもう少し強化して、そこに持っていくというのも必要でしょう。それから、金融・銀行機関がつるんで貯金金利をあまり上げさせないということは公正取引委員会の仕事ですから、公正取引委員会がきちんと仕事をする。こういうことも必要です。

しかし、もう銀行の行政の中で一番弱い所を保護する、彼等は貯金者保護と金融機関保護を一緒くたにしていると思うんですけど、そういったようなものはもう要らないと私は思っております。同じようなことが証券局にも言えると思います。証券局はもっとひどいでしょう。本当に要らないだろうと私は思います。国際金融局というのがありますが、これも要らない。通産省もだいぶスリムになってきましたけど、通産省の原局なんて要るものがどれだけある

MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...

FOR A CHANGE

フォー・ア・チェンジ

定期購読受付中

世界中で起こっている変革(チェンジ)とそれを担う人たちの動きを原文で!

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌、(英文年間6回発行) 定期購読ご希望の方は住所、氏名、電話番号を明記の上、購読料(1年分=¥4,500 ※郵送料込み)を郵便振替(口座番号:東京8-38289)、又は現金書留にて下記の住所にお送り下されば、申込みを代行いたします。

〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウス ミタケビル102
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

のだろうか。原局というのは例えば、繊維関係の業界に対して目を光らしている局です。それから重工業とか、やれ何だかんだとありまして、本当に要るんだろうか。それから地方の通産局なんて本当に要るのか。これなんか大部分は私は要らないんじゃないかと思います。

文部省なんかも本当に要るのかなぁと思う時があります。実は私事になって恐縮なんですが、東久留米市に住んでおりまして、市長が行・財政の改革をやるということでちょっと来てくれないかという事で、しょうがなく、何となく巻き込まれまして、小学校の適正化、統廃合などを検討させられた訳ですが、驚いたのは文部省というのはこんな所まで口をはさんでくるのかなぁということです。全ての学校の学級数は十二から十八でなければならない。よくもこんなことを決めますね。いろんな島もあるし、都市もあれば田舎もある。それを全ての学校の学級数は十二から十八でなければならないとか、通学区域は幹線道路・鉄道を越えてはならない。鉄道は危ないから分かりますが、しかし幹線道路と言っても歩道橋もありまして、どこ行ってもいろんなものがあるんだろうと思います。文部省は実にいろんな事を、箸の上げ下ろしまで決めている。そんな事をやるから日本の教育は段々画一的になっていくんです。今日は先生の方々もいらっしゃいますから、後で激しくお叱りを受けると思いますが、私の私見を最初に述べさせて頂きたいと思いますけれど、文部省は実に細かい所まで決めていると思います。これも日本が何とかして先進国に一刻も早く追いつくために、全国画一的に一定の教育水準を実現しなければならないという、そういう残骸みたいなものが、まだ残っているのかなぁと思います。

運輸省、郵政省に至っては問題外です。この規制の激しさ。規制というのは必ず利権を生みますから、これは本当に少なくしていかなければならないと思います。

でも、私がこういうことを言っても虚しいんですよね。やらないんですから。いくら言ってもやらない。で、この間ああいった社説を書いて皆でやろうじゃないか、共に取り組もうということでやったんですけど、政治家がやるかというと、さきがけなどは良い意味でかなり乱暴にいろいろな提案をしていますけど、自民党や社会党なんてやらないですよね。やらないどころか、最近の大蔵省の廊下に行かれたら分かりますけど、昔以上の陳情団で大変ですよ。選挙が近いっていうのもありますし、小選挙区というのは良いこともありますけど、下手するとこれは利権のパイプが一人になってしまいますから、現職絶対有利という話ですので、とにかく最初に勝たなくてはならないという事で、しゃかりきになる。そういう意味において、むしろ、役人にゴマすってスリ寄っているという現象が今おきていますので、これはなかなかやらないから虚しい。

税金を拒否するということをやってみたらどうか

どうしたらいいんだろうか。それで考えたのが、海外時評で書いたものでございます。要するに特殊法人の整理について「拒税の勧め」と、拒税は税を拒否することです。これは実はカリフォルニアで七十年代に一つの住民運動がおきまして、固定資産税をうんと削減せよという話がおきまして、これは燎原の火の如く全米に広がりまして、そしてもう大きな政府はご免だと、小さな政府を欲しいんだということで、レーガン大統領が誕生した一つの大きなモメンタムになった訳ですけど、欧米の場合は反税運動、反税党の動きがあった事もございます。それから個人では、作家の村松梢風さんが自宅の前の道路をいつまで経っても直さないから、私は税金を払わないという運動をおこしたこともあります。納税という言葉は変だと思うんですね。お上に納める。そうじゃないんです。これは英語で言うとタックスペイヤー（TAX PAYER）ですから、我々は税を支払っている。ですから一定の行政サービスに対して税金を支払っている訳ですから、欲しくないものを一方的に買わされるので

はたまらない。欲しくないから買わない。お金は払わない。つまり税金を納めないと言ったら大問題になるということなら、いっそのこと税金を拒否するということをやってみたらどうかと。これは一つの問題提起としてやったことで、本気になって拒税党を作ろうという話ではございませんが、そういう手段だってあるんだぞ、という意味で書いたんです。そうしましたら、たくさん投書を頂きまして、中には大変真面目な読者もおられて、「私はブタ箱に入る覚悟を決めました。一緒に入りましょう」なんて言われて、女房に相談したら「ちょっとやめてよ」ってな話ですけど、ただ調べたところによると、全国の刑務所の収容人員というのは四万五千人ですから、赤信号皆で渡れば恐くないの精神をこういう際に発揮して一斉にやったら、刑務所はたちまちパンクしてしまいます。ですからこれは冗談として聞いて頂きたいのですがと、ちゃんと書いたんですけど、真面目に受け取られた方がいらっしゃったので、うれしいような、困ったような感じがしたんですが、我々は税というものについて、もっとちゃんと考えた方が良いと思うんですね。そういう手段が我々にはあるんだろうと思います。そういった意味において、できたら納税者というものと無関係に、大変ひどいことが行われているということを、もっともっと透明にして知らせていくということが大事で、拒税といったものの考え方も一つの、実際にやるかどうかは別にして、考え方になり得る。

行政手続法の有効活用を

もう一つはあまり注目されてない意外に地味な法律なんですが、大事な法律が去年成立しているんですね。それは行政手続法という法律です。これに基づいて北九州の通産局のプロパンガスの業者が「こういう行政指導はひどいじゃないか」ということを申し出たところ、それを無視されたという事で、経団連に持ってきて、それを撤回したという事がある訳ですけど、行政手続法というのはとても大事な法律です。これですね、なかなかお役所は恐いですから、江戸の敵を長崎で討つような事をするものですから、なかなか喧嘩をするのは難しいのですが、行政手続法というのは、不当な行政指導だなぁというふうに感じた時は訴えて、なぜそういう事をやったんだということを、文書を以て明白に提出してもらうこともできるし、様々な手続きを決めている法律ですが、このプロパン業者の話を聞いた時も社説でこれを大きく取り上げて、良いことじゃないかというような事を書いた訳でございますけど、この法律をもっともっと有効に活用していくという事が必要だと思います。

「お上頼み」を止めていく

もう一つは、実は我々の中に原因がある。余りにもお上頼みだと思うんですよ。実は、私事になりまして、その東久留米の話になりますけど、女房がボランティアをやっておりまして、そのボランティアは何かと言うと、一人暮らしのお年寄りに食事を作って配るというボランティアなんですけど、何となく横で聞いていると、すぐ行政はどうしているんだという話になる。行政がもうちょっとこうやってくれれば、こうなのにってな話になってしまう。しかしボランティアってものは行政とは本質的には無関係ですね。なんでもお上頼みの部分がある。

マスコミにも原因がある

マスコミにも原因があります。例えば飛行機が落ちる。そうすると、何やってんだ運輸省はって、すぐ書くんですね。そうすると運輸省は、それはいかんということで、航空会社に対する監督を強めていくことになるでしょう。ですから、我々の中に随分お上頼みの部分があるんだろうというふうに思います。私、ワシントンに八十一年から八十四年までいた訳ですが、その時にフロリダ空港の飛行機が一度、大変雪の深い日にポトマック川に落ちました。その時にちょうど折り悪しく、航空官制官のストをやってたんですね。その最

中に飛行機が落ちた。これは私直観的に思ったのは「やられるぞー、運輸省は」と、こう思ったんですね。もうこれは確実にマスコミにやられるぞと思ったんですね。そうしましたら、一時間後にアメリカの運輸省は、「アメリカ運輸省はこの事故には責任はない」と、発表しました。あっと驚いた訳ですけども、アメリカの運輸省に対してどうのこうのという議論はおきなかった。それは、何か事があると全てお役所が悪いと必ずしも考えない部分がアメリカのマスコミにあったということでして、大変教えられる気持ちがした訳ですけど、そういった意味において我々の中に随分とお上頼みの気持ちもあるし、のみならず、業界の中には、規制のおかげをこうむっている人達も随分いる。そういった意味において、お上頼みを止めていくという事も大事なことじゃないかと思います。

スリムな政府を実現するための手段

それからもう一つ、これはどうしても申し上げておかなければならない事だと思いますけど、規制緩和・撤廃、そして、役所をどんどんスリム化し、政府を今よりも小さくしていく。こういうことを申し上げている訳ですけど、じゃあどこまで小さくしていくのかということを、ちゃんと考えておかなければならないと思います。夜警国家にいくのかという事ですね。つまり、外交と国内の治安だけが保たれれば、もうそれで限りなく政府の存在はゼロに近付けば良いんだと、我々は考えるのかどうかという事は、ちゃんと整理をしておかないといけないと思います。私は結論を先に申し上げると、それは我々現代の中においては、夜警国家はそぐわないと思います。どんどん小さくしていった最後の姿として、頭の中の実験室のフラスコの中に考えておかなければならないのは「最適政府」です。政府の最適量、最も適した機能というものは考えておかなければならないと思います。

それは例えばどういう事かと言うと、環境基準についてどういうふうに考えるか。同時に環境税というものを将来考えた時にどう考えるか。あるいは、製造物責任制度（ＰＬ）についてどう考えるか。衛生、安全についてはどう考えるか。あるいは、民間に任せておいてはとてもできないような大きなプロジェクトについて、政府はどれだけ手を貸すべきか。あるいは、独禁法の運用というものについては、どういうふうに考えていくべきであろうか。あるいは基礎研究。とても儲かりそうにないような、しかし将来的に人類のためを考えるなら、これは今のうちにやっておいたほうが良さそうな基礎研究については、どのように考えていったら良いかというような事を、つまり最適政府はどうあるべきかということを議論するべきだと思うんですね。その議論が今一番欠落しています。規制緩和の方でも、政府の在り方においても。これはビシッと議論しておかなければならない事だと思います。その議論をする時には、日本国内だけではダメです。この問題はもっともっと国際的な制度の平準化、あるいは調和ということ頭の中に置いて考える時が来ています。

この間ＡＰＥＣ、アジア・太平洋経済協力会議の首脳会議で、２０２０年には、このＡＰＥＣ地域、アジア・太平洋地域の貿易投資の自由化宣言を出している訳ですね。２０２０年のアジア・太平洋地域はどうなるか。考えただけでも想像を絶するような巨大マーケットになります。２０２０年には、中国と香港と台湾を合わせた中国経済圏ができて、アメリカに匹敵する巨大なマーケットができるという事です。巨大なマーケットができるという事は、モノとかヒトとかが、もう行ったり来たりしているという状況がなければそうなりませんけど、そういうふうになるというその時に、それぞれの政府が皆違った制度とか、ここに行くと環境税があるとか、ここに行くと無いとか、大体空気なんてどんどん国境を越えてやって来ますから、共通の制度を持っていかざるを得ない。ですから、こういうことを議論する時は、日本国内だけでなくて、将来の日本を含めて、将来のあるべき政府の量と最適

政府、そしてやらなくてはならない機能というものを、今から議論をして置く必要がある。このところが欠落しているから、結局のところ規制緩和に反対する者は錦の御旗に反対する奴だというふうになるし、逆に今度は日本的やり方があるからどうのこうのといった話にもなって、不毛の議論になってしまう。そのところを国際化の視点というものを入れて、最適政府の議論をしておく必要があるだろうと思います。以上はスリムな政府を実現するための手段です。

首都圏機能の移転

日本を強くするための政府というものを考えてみた場合、私は首都機能、首都圏移転というのは大事な事となると思います。なぜかと言うと、内需型の経済を作るというのが一つです。バカバカしい話ですけど、一所懸命国民が一年間働いてつくり出したモノとサービスの量よりも少なくしか我々消費してないんですよ。ですから余りますから輸出している。お金の流れでいうと、国民が一年間作ったモノとサービスの量というのは売上高です。売上高よりも少なくしか消費していない、仕入れていないという事ですから、お金の額は黒字になるから、この黒字は何やってるんだというと、ドルという名のどんどん値段が下がっていくものを持っている訳です。こんなバカバカしい話はないです。その余ったお金をこれまでは、どんどん値段の下がっていくドルの債券を買っていたけれども、あまりにひどいので、もうこりごりして、今国内にダブついているという形で、生命保険などは短期コール市場と言って、お金を運用しているという現象がおきている。そんなバカな話はない。こういうお金はきっちり内需、つまり国内を豊かにするために使うべきです。その手がかりとして、内需型の経済を作ることが大事です。

第二は、今のお役所、霞ヶ関をそのまま大きなトレーラーに積んで、明治村を作ったみたいにそのまま移転することにはなりません。新しい首都にしたいんだという事ならば、当然のこ

MRAビデオのご案内

日本語吹替版

明日を愛するがゆえに

——イレーヌ・ロー夫人の生涯——

頒価 5,000円
（郵送料サービス）

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

独仏の歴史的和解は勇気ある人々により始められ、後のEC設立の礎となった。

好評頒布中！

●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人そして母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。これが、独仏間の関係改善の道を開き、後のEC設立のきっかけとなった。マルセーユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

お申し込みは
MRA事務局へ 03(3821)3737

とながら、高度情報通信網ネットワークというものを、率先して作れば良いかと思います。これが二番。これをやれば、ちょうどワシントンとニューヨークのように、実際のビジネスをやっている所と、そして司法、行政、立法、この機能を営んでいる所が地理的に離れますから、それだけでは期待できないかもしれませんけど、これは癒着というものを引き離していくという結果にもなる訳です。それから当然の事ながら、これから今の大蔵省の何局、そのまますっぽり移していく事はしませんから、この局はもう少し増やした方が良いんじゃないかだとか、この役所はこういうふうにまとめた方が良いんじゃないかということで、当然行革の議論も進めた上で移転するということになる訳です。そういう意味において、私は首都圏機能の移転というのを真面目にやって頂きたいと思います。

それからもう一つは、院とつく組織が随分あるんですが、例えば、会計検査院、人事院、工業技術院、それから衆議院、参議院とか、院のつく所は私はうんと強くなるんだと思います。会計検査院なども、もっともっと強くして、そしていろんな無駄が行われている所を、もっともっと具体的に摘発して厳しい懲罰を加えていくという事をやるべきでしょう。人事院なんかも、なんだかこれは本当に開店休業みたいな存在ですけど、もっともっと強くなって立派になってもらいたい。工業技術院もいろんな議論があり得ますけど、私はもっと基礎研究についてやっても良いんじゃないかなぁと思っています。そういうふうにすれば、日本も結構良い国になるんじゃないかなぁと「2025年日本の死」に書いたようなグルーミーな話じゃなくて、良い国になる可能性を持っていると思います。

創意工夫を皆が安心してできる社会を作っていく

実は日本というのは捨てたものではなくて、こんなに犯罪の少ない国はありませんし、きれいです。公害も克服しましたし、やっぱ[illegible]く生きるというのは、古今東西の人間の夢だったわけですよね。それをちゃんと世界一のものを実現しています。そして地方に行くと、駅前は皆同じ感じですけど、よくよく見てみると、食べ物にしろ様々な地方文化がまだちゃんと存在してますし、のみならず、最近そういった地方文化というものとハイテクがドッキングして、新しい形のベンチャービジネスができている。立派なものだと思うんですよ。日亜化学なんて、青色ダイオードという、結局壁掛けテレビにつながっていくものを作った四国の会社がありますけど、それは元々ガラスの細工の会社から発生したもので、こういう例はいくらでもあります。地方文化というものとハイテクがドッキングして、新しい産業というものも芽生えてきている。ですから、そんな捨てたものではない。第一、ゴミの処理なんかも、最近ちゃんと主婦の方々分けて捨ててますよね。前はそんなことはなかった。ですから、私は方向さえ間違えなければ、結構良い国になるんではないかと思うんですよ。若[illegible]人達もカンボジアとか、いろんな所に行って、NGOで意味のある仕事をしていらっしゃいますし、私はカンボジアというのは大好きで、もう二回ばかり行きましたけど、結構良いんじゃないかなぁという気がする時もあるんです。こういった芽をよく育てられるように、そしてのびのびと、画一的ではなくて、創意工夫を皆が安心してできるような社会を作っていくという事を、今のうちにやっておく必要がある。

そのためには、あんまりお役人をいばらしちゃいかん。お役所なんていうのは、高度情報通信の問題でも、通産省と郵政省がドンパチやってますし、デリバティブなんていう金融の商品について、大蔵省が何とか規制しなきゃならん、なんてやっていますけど、まだ無いものについて、どうやって規制するというんでしょうね。まだ無いものについて、どういう根拠を以て、やり過ぎだとか、やり過ぎじゃないとかの調整をしようとしているのか、本当に不思議に思います。まずやらしてみるということなんだろうと思います。や

はりそういった小さな企業でも、やる気のある経営者、そして創意工夫もあるし、技術のバックグラウンドもあるという人達が一番困るのはお金がないということです。ところがニューヨークはナスダックという、これは博打みたいなものですけど「私はこういうことをやりたいんだ」

対外的には日本がどのような姿であるべきか

最後に対外問題についてお話しをして、国内の姿、形だけではなく、対外的に日本がどのような姿であるべきかという事を、話させて頂きたいと思います。この部分は随分議論があると思いますから、これから申し上げる事は別に日本経済新聞社内のコンセンサスではなく私個人の考え方です。

先ず日米安保ですが、これは確実に空洞化してきています。日本のこれからの対外関係をしばらくは支える必要条件ではあり続けるでしょう。しかし十分条件ではなくなりつつあると思います。吉田茂は安保を作った後、彼はアメリカの再軍備の強い要求に対して「出来ない。こという●●を言ったら、この指止まれでお金をバーッと出す。店頭市場がちゃんとある。しかし、日本においての東京市場というのは大変ハードルが高くて、ああでもない、こうでもないという事を大蔵省が言うものですから、なかなか店頭市場には上場できないという事であります。

の安保条約で勘弁してくれ」と、この条約を作ったんですけれど、彼はその時「条約なんて紙切れ一枚だ。これがどういうふうになるかは後世が決めることだ」と言った訳です。多分我々は彼の言った後世の人間なんだと思います。今のままでは安保条約は空洞化する。なぜなら最大の仮想敵国だったソ連がなくなってしまった。ですからこれは安保のレゾンデートルみたいなものが揺らいできてしまったんだろうと思います。

ただし二つ意味がある。一つは、これがあるおかげで日本は軍事大国化しなくてすんだ。日本を軍事大国化させないために安保があるということが一つ。

もう一つはソ連●くなったものの、まだ朝鮮半島に不安な要因があること。中国と台湾の間にも台湾の独立、それに対しては軍事行動を起こすぞと中国の指導者が言うというような問題もありますし、アジア各国が軍拡に走っているという事もありますし、ベトナムと中国の間には南沙諸島、あそこに油田があるのですけれど、南沙諸島の帰属を巡ってごたごたがあるという事ですから、ヨーロッパに比べるとアジアは、経済的には大変な可能性を持っていますけど、政治的な不安要因がある。

そこで、日本の米軍基地というのはアメリカ国内に基地を置くよりも、我々がお金を出しているのでコストとしては安上がりですから、その日本の基地を足がかりにして、そういった「いつでも米軍が行動を起こせるよ」というような態勢にあるという事はアジアのこういった政治的不安要因を和らげる意味で役立っているという面があります。

私は後者はそうだと思います。

ただ前者は日本を軍事大国化しないために安保があるというのはジレンマに陥ります。なぜかというと、日本は軍事大国にはならないとアメリカが信じたらその意味を無くしてしまう。ですから、我々はいつでも軍事大国化するかもしれないよと陰に陽に言いまくって、相手を疑心暗鬼の状態にしておかないと安保の価値は無くなるというジレンマに陥ってしまう訳です。これはいかがなものか。そんな事よりも、もう軍事大国になるつもりはありませんよ、ということをはっきり言って、その部分の価値はもう無くなって結構ですと、しかし、それに代わる安保の価値はなんでしょうか、という話をした方が私は良いと思います。

まぁそれはそれとして、二番目に申し上げた事は、しかしそれくらいしか意味が無いんですね。安保というのは、そういうふうになってきていると思います。ですからここで大事なことは、日米がこれからも同盟関係を続けて行くんだという事ならば、安保があることによる新しい意味と、安保はこういう意味のためにあるんだと言う意味付

けを発見していくことが出来なければ、これは長い目で見ると空洞化してしまう事だろうと思います。

我々は五百年振りにやってきた大きな波の中にある

同時に日米安保が必要条件だけれど十分条件ではないもう一つの時代背景は、我々が多分五百年振りくらいにやってきた大きな波の中にある事だと思います。それは何かというと、五百年前にスペインのグラナダからイスラム勢力が撤退して西洋というものが力を持ち、それが大西洋を渡ってアメリカに、というふうになった訳ですが、どうも「アメリカの正義だけが世界の正義じゃない」という空気が広がってきていると思うんですね。とりわけこのアジア地域を中心に、マハティールなどは全く良い例だと思うんですが、このアジア地域を中心に、そしてアジアだけでなく、ボスニア・ヘルツェゴビナにおける欧米の対立なども、非常にそれが如実に表れていると思うんです。アメリカの正義が、正義であることは認めるけれど、アメリカの言っていること全てが正しい、正義とは限らないよ、という気運が広がってきている。

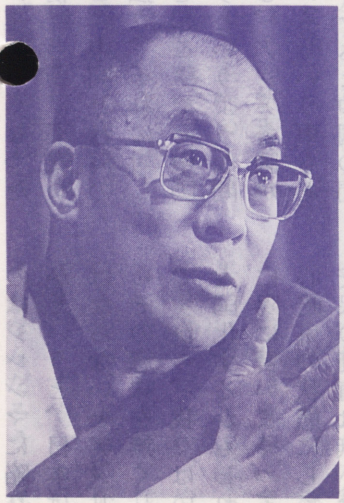
これはキリスト教文明が圧倒的な力を持ったこの五百年というものから考えると変わり目にきていると思うんです。日本なんていうのは困ってしまうもので、マハティールさんからは入れと言われて、アメリカからはダメということで本当に困って、今外務省は内部で激論を交わしているそうです。激論を交わしている時の外務省は対外的には沈黙になる。今どっちにするかという激論を交わしている状況の様ですけれど、とても困った状況です。

サミュエル・ハンティントンという人が「文明の衝突」という論文を書いたんですね。日本も一つの文明に入れてくれる訳なんですけれど、彼の頭の中にあったのはキリスト教とイスラムとの衝突です。このASEANは、華僑というとんでもないノンポリ集団と、マレーシア、インドネシアのイスラムという、彼等は多様な原理主義、ファン

◇関係ビデオのご案内

ダライ・ラマ14世からのメッセージ

愛と心の平和



編集・発売　アジアフォーラム
企画・製作　㈳国際MRA日本協会

好評発売中！

VHS(20分)4,500円　日本語吹き替え

MRA体験記

出逢い

No.4

好評頒布中！

頒価450円

お申し込みはMRA事務局へどうぞ
バックナンバーもございます

ダメンタリストで、ファンダメンタリストと言われると「いやそうじゃない。我々はプリンシパリストだ」と言いますが、大変原則にこだわる政治的性格の強い集団との複合体です。それとアメリカのどっちに行ったら良いのかと、我々は大変困っている訳です。アメリカの正義だけが正義ではないという時代には、安保にさえ寄りすがっていて、とにかくアングロサクソンの言うことだけ聞いていれば、全部結果オーライになるんだという発想ではなかなか対処しきれなくなっているのが、今の現状だろうと思います。

安保は必要です。日米の同盟はこれからも維持していかなければなりません。そして、その同盟に新しい意味を付けなくてはいけない。しかし安保にだけ寄りすがるということは、これからの対外関係において十分条件にはならないと私は思います。

国連の可能性と限界

ではどうしたら良いのだろうかという事です。国連じゃないかと、●に考える訳です。しかし、この二、三年の間に示された事は、国連には可能性もあるが限界もある。何かと言うと、端的に表れたのがソマリア。このソマリアに行って、ガリ事務総長は国連平和執行軍というのをやって、そして紛争の片方の当事者と場合によっては戦っちゃうということをやって、とんでもない事になった。で、アメリカ軍はCNNでアメリカ軍の兵士が相手方のアイディード将軍率いるグループに殺されて、足に綱か何かをつけられて、埃っぽい道をジープに引きずられて走っていくようなシーンが流れたのを見た。これもかつてのアメリカから比べると、本当に変わったなぁと思ったんですけど、かつてのアメリカだったら、懲罰くらいしますが、アメリカは「もうこれで止めた」と言ったんですね。アメリカは今は共和党が中心に、国益と関係ない所にPKOなんか出すのを止めようじゃないかという法案を起草している段階です。こういう状況ですから、国連というものは、所詮は紛争当事者が合意をして「どうぞ、あ●来て下さいよ。あなたがいないと我々、□ともすると喧嘩してしまうんで来て下さい」という当事者同士の合意のある所に出ていくべきで、国連自身が紛争当事者になるというのは、もうダメだというのが立証されつつある状況ではないかと思います。ですから、当事者がOKだと言ったら、国連は有効に機能する。しかし、そこへ出ていって、場合によっては国連軍がドンパチやってしまうということは、なかなかもう難しい状態になってきていると思います。したがって国連にも可能性と限界がある。ではどうしたら良いのかという事です。

新しい脅威の出現

もう一つは、今大小さまざまな紛争が世界各地でおきている訳ですが、どうもその紛争というものも、敵がはっきりしているものもあれば、誰が敵か味方か分からないものも、物事によっては敵、物事によっては味方というような非常に灰色なゲームになっていることが一つ。そしてそれに大変関連する事ですけれど、ソ連の脅威に代わる新しい脅威というようなものも出てきている。

それは何かというと、例えば人口の爆発による出稼ぎとか、難民の群れですね。国境をどんどん越えて行ってしまう。そして環境の問題もあります。そしてある日突然「マラッカ海峡で通行税を取るよ」と言い出すというような、こういった「弱者の恫喝」というようなものもある。この間フィリピン航空が沖縄の上を飛んできて、フィリピンのモスリム系統の仕業じゃないか、いやそうじゃないとか言われていましたけれど、ある国内の紛争が全く関係のない第三国にテロという形で降りかかってくるというような現象もある。

人口の爆発による資源とか食料の争奪戦という事もある。例えばルワンダという国は種族間の対立で、ああいうことをやっていると言われていますけど、前から対立する種族は二つか三つあったんです。なぜその種族が血で血を洗う争いを始めたかというのは、ルワンダに行かれ

たら一発でわかります。もう山はまったくのハゲちょびで、これは要するに何が起きたかというと、人口の爆発が起きて、水争いと土地争いが起きたのです。そういう時に種族間で戦ったという訳です。ルワンダの出生率は八・五。世界一です。一人の女性が平均で一生の間に生む子供の数は八・五。こういう事がおきている。これは一つの新しい脅威です。そしてその様々な、今申し上げた脅威が簡単に国と国、国と民族、民族と民族との対立になり得る。こういう世界の中で我々は生きている。新しい脅威の問題が一つ。しかも誰が敵か味方か分からないというような灰色のゲームの中にある。そして「弱者の恫喝」の様なものもある。

紛争を予防する手段を考える

このような時に、これは新しい脅威一つとっても日米安保だけでは対処できないという問題になってくるだろうと思います。では、どうしたら良いかという事ですが、実はあんまりこれといった決め手はありません。結局のところ、何が我々の安全を脅かしているのだろうかという事を、これもやはり日本とアメリカそしてアジア・太平洋の国々との間で政府だけではなくて、経済界も含めて、学会もジャーナリストも、そして最も大事なのはNGOですけど、これらを含めて我々の安全を脅かしているのは何であるかという原因分析をきちっとして、共通の認識を作り上げて、紛争を予防する手段を考える。その手段は軍事力だけではダメでしょう。この新しい脅威に対する対応というのは軍事力のみならず、様々な人事交流も含め、文化交流も含め、技術、経済援助も含め、様々な多様な手段によって、その我々の安全を脅かすものに対して予防し、そしておきたらそれに対処する。そうしていったん平和が確立されたらそれを管理していくという事を複数の国々で、しかも色々な段階で話をしていく必要がある時に来ていると思います。

そしてその時日本は何を主張するんという事になれば、そ

第19回MRA国際キャンペーンのご案内

総合テーマ「和解と共生への課題」

—戦後50年、今、新たな出発を考える。新しい自分、家庭、社会、そして世界—

□暫定スケジュール

10月7日（土）～8日（日）　関西秋季大会
14日（土）～17日（火）　MRA国際会議
[15日（日）　小田原国際ダイアローグ
[17日（火）　東京国際ダイアローグ

□パネリスト

ダグラス・ジョンストン	（戦略国際問題研究所-CSIS-副所長、アメリカ）	小田原・東京
レニー・パン	（カンボジア子供教育基金代表、カンボジア）	小田原・東京
アレック・スミス	（元「良心の内閣」メンバー、ジンバブエ）	小田原・東京
城山　英明	（東京大学法学部助教授）	東京
渋沢　雅英	（アジアセンターODAWARA代表、東京女学館理事長）	小田原
相馬　雪香	（難民を助ける会会長）	小田原・東京
堀本　崇	（松下政経塾研究生）	小田原

●今回のキャンペーンでは、各国の人々との間に信頼関係を築くために日本の過去のあり方を振り返ると共に、これから一体どのようにして日本と日本人が、貧困・環境・民族紛争といった世界の様々な問題の解決に貢献していくべきかを探りたいと思います。お問い合わせはMRA事務局へ。

れは極めてはっきりしています。我々の今までやってきた事をよく見れば結構良いことをやってきています。

非核三原則の国際化

例えば南太平洋においてニュージーランドが音頭を取って、非核地域というものがもう出来てきています。スービック、クラークが無くなったから、やがてフィリピンも入るでしょう。ですから、例えばそういった非核地域を少しずつ広げていくというようなこともあり得るでしょう。あるいは、武器を輸出してはいけないという事を我々は原則として持っている。それをもう少し国際化していく方法もあるでしょう。

経済援助と環境技術の移転を組み合わせる

世界に冠たる環境技術を持っている。それを超経済援助大国となった日本は、それと環境技術の移転というものを組み合わせていく。中国はこれからいったいどうなっていくのか、考えただけでも恐ろしくなりますね。政治的にバラバラになって難民がどんどん来るのも困りますけれど、経済的に順調に発達してどんどんモータリゼーションが進んでいった場合、日本海あたりの酸性雨は一体どういうことになるかというのが心配です。中国においては環境をよくする技術が良くできていないだけでなく、実は測定技術も発展していない。測定値も公表されていない。そのような問題について、我々は世界に冠たる環境技術がある訳ですから、経済援助というものと組み合わせて、そして中国から日本海を越えてやってくると困るからというのではなくて、これは何も日本だけではなくて、アジア太平洋に入っている国々皆でどうやってやっていくかと話し合うやり方もあると思いますし、やったら良いと思います。我々が今迄やってきたことをやれば良いと思います。

マスコミのあるべき姿

最後に、どういう日本になるべきかという事を申し上げました。随分官僚組織に対しても言いたい事をいいましたし、政治家に対しても言いたい事を言いました。これはマスコミについても言わないといけないと思いますので、マスコミのあるべき姿についても一言申し上げておきます。で、後でもっともっと言い足りない、お前さんは反省が足りないという事でしたら言って頂いて結構です。私はマスコミもこれからきちっとしていかなければならないというふうに思っています。で、三点。

一、データを持つ

第一は、データをきちっと持つ。極めて地味な話だとお考えになる方もいると思いますが、とても大事な話だと思います。今はあまりにも様々なデータが行政組織に一手に握られている。ですから記者クラブ制度とかなんとかって言われていますけれど、行政から発表になる以外の様々なデータ、例えば経済のデータとか何でも、他にお前さんあるのって言われたら、何にも無いから結局頂くしかないんですね。我々は情報機関としてもっともっと様々なデータを蓄積し、それも単にこんなものが集まりましたというのではなくて、定点観測し、長い間蓄積をしてきちんとしたデータを、つまり行政の持っているデータに、場合によっては対抗出来るだけの、お前さんの行っていることは違うよと、景気が良くなってきていると言うけれど嘘ばっかり、まだまだ悪いとか、いや景気が悪いと行ってるけど嘘ばっかり、結構良いということを、景気一つにとっても言いうる様なデータを持つという事が先ず大事だと思います。

二、対案を持つ

第二は、マスコミは政府、政治を叩くだけではなく、対案を持たなくてはならない。読売新聞が憲法の改正案というものを出しました。これは随分議論がありましたが、私は憲法改正案というのは案そのものに賛成、反対と言われたら、非現実的だねと、今なぜ改正する必要があるの、さっき申し上げた通り、

国連があの様な限界が出てきているというのに今更日の丸立てて、ドンとかやって、何か役にたつのと、本当に賛成ならば改正すればいいし、必要ないなら別に改正する必要ないじゃないかと、なぜ今のタイミングでやるのと、個人的に考えています。

しかし、読売新聞がああいう憲法について草案を出すという事についてはいかがなものかという議論もありますし、結構だという議論もありますけど、どうだと問われるなら、私は良いと思っています。マスコミにとって政府という存在はサンドバックみたいなもので、叩きゃ叩くだけでいいんだ、叩いていりゃいいんだ、というのは良くないと思います。これはこうしなさい、それはこうあるべきじゃないかと言う事を具体的に提案するのがマスコミの役割であり、もう一つの役割だと考えている訳です。

三、著名記事を多くする

三番目はもうちょっと具体的な話になりますけど、もっと署名記事を多くするという事かと思います。これは、かねてから主張しているんですけど、ジャーナリストというのは世間がこっちの方にずーっと傾いたら、いやちょっと待てよと、こっちもあるじゃないかと、ずーっと上の方へ言ったら下もあるよと、バランス感覚を持っていなければならないんじゃないだろうかと思っている訳です。同時に自分の物差しを持つ。人さまから頂いた物差しだけじゃなくて、そして世間の空気が一方にパーッと流れて、その空気に乗った形の物差しではなくて、自分の読書と勉強とそして自分の靴の底を減らして自分の足で歩いて確かめた、そういう事実というものに裏付けられた自分の物差しというものを持っていなければならないと思います。で、その物差しを持った記者が自分の名前で書けば良いと思うんですね。何もその主張とか回想だけではなくて、どこそこで火事がおきたという事に関しても、その記者が署名入りで書いたら良いと思うんですよ。

そうう署名入りの記事をどんどん増やしていくことによって、今言われているところの、一種のポピュリズムに乗りやすいマスコミの体質とか、それから、これだけこういうふうにしゃべったのが、ここだけワーッと大きくなってしまったのはおかしいじゃないかという事も、その書いた記者の記事に名前が載る訳ですから、全責任を負わなければならない。記者クラブでマージャンなどしていちゃいかんという話になる訳でして、そういった意味においては、私は署名記事をもっと増やして、良いジャーナリストをたくさん作っていくという事が必要だと思います。

最後に自分の事を言わないとずるくなりますから、マスコミ論を言わせて頂いたという事で、一応この辺で私の話を終わらせて頂きたいと思います。いろいろ駆け足になりましたし、早口にもなりましたし、激しいことも申し上げましたが、ご批判もあると思いますので御遠慮なくいろいろ言って頂きたいと思います。どうもご静聴有り難うございました。（了）

▽事務局通信△

●第四十九回コー世界大会は、去る七月八日に開幕し、ヨーロッパ会議「多様性を生かした協調」から、青年会議「明日の社会を考える」、日米欧経済人コー円卓会議、産業人会議、都市問題会議、そして最後の紛争地域会議「危機に陥っている地域、危機を脱しつつある地域―互いの経験から学ぶ」まで、五十日以上にわたって開催されました。また、フィリピンでもマニラ、バギオなどを会場にアジア太平洋青年会議が七月二十三日から九日間行われ、日本からも七名が参加しました。

●来る十月七日（土）より十七日（火）にかけて、第十九回MRA国際キャンペーン（総合テーマ）「和解と共生への課題―戦後五十年、今、新たな出発を考える」が神戸での関西秋季大会（七日（土）～八日（日））を皮切りに、小田原、東京で開催されます。十五、十七の両日には、それぞれ小田原、東京で国際ダイアローグも開かれます。お問い合わせは事務局までお願いします。

●十二年にわたり当協会職員として活躍された寒河江亮さんが、この度、八月末をもって退職し、夫人と一緒に新しい道を歩まれることになりました。長い間、本当にお疲れさまでした。

尚、後任として加藤保之君が事務局入りしました。また成城大学四年生の太田敦之君が常勤アルバイトとしてワールド・レターの編集等を担当している他、「ユースフル」（MRA青年グループ）の企画・運営にあたっています。若い人々の今後の活躍に期待したいと思います。